日本大学大学院総合社会情報研究科紀要　No.10, 355-364 (2009)

ヘーゲル論理学における「端初」の概念

川太啓司
日本大学大学院総合社会情報研究科

The Notion of “Beginning” in the Science of Logic of Hegel

KAWATA Hiroshi
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

In this paper an attempt is made to analyze the notion of the “beginning”(Anfang) in the Science of Logic(Wissenschaft der Logik) of Hegel(1770-1831). The important thing is not to determine whether the beginning is immediate (unmittelbar) or mediated (vermitellt), but to know that when something starts from the “beginning” and comes to an “end,” that something has made itself more concrete and enriched. That is because, coming to an “end”, that something has reached a “Resultat”, in other words, it has “mediated” itself on the way. The point is to comprehend and “conceptualize” something in its whole process of moving from the “beginning” to an “end”, mediating itself to become what it is to be.

はじめに

G・W・F・ヘーゲル(1770―1831)は、産業革命やフランス革命とナポレオンの出現とその没落というヨーロッパの歴史が大きく転換する時代において様々な矛盾や限界と対決し、意識的に時代の子として生きながら歴史の中で現実と対峙してそれを捉えようとした哲学者であった。こうしたヘーゲルの論理学は、思考と存在との同一性を原理として展開されたものであり、それは難解であると同時に極めて内容豊かな哲学である。このようなヘーゲルの論理学は、純粋な理性的概念を学問的に叙述し展開しようとしたものであり、もっとも単純な理性的概念である純粋な存在という概念から出発して次第により豊かな諸概念へと進むのである。そして、抽象的概念がより具体的な概念へと発展することを示すことによって、純粋な理性的知識の全体系を導き出そうとしたのである。ヘーゲルは、論理学において学問の端初(Anfang)を直接性と媒介(Vermittels)との関係において捉え、どのようなものであるべきかという問題を提起することで学問的な端初の論理を展開している。そこで、この小論の目的は、論理学の端初をなすものは端初であるからして直接性なのか、それとも端初は媒介されたものであるから、つまり、媒介されたものその媒介されたもの自身が端初をなすものなのかを明らかすることにある。

(1)

ヘーゲルは、論理学の冒頭で論理的カテゴリーのうち最初のもっとも抽象的なカテゴリーである有を出発点として捉えている。次いで有の真理は、成であるとして有(Sein)無(Nichts)成(Werden)の弁証法を展開している。そのことについて松村一人氏は「有・無・成は最も単純なカテゴリーであるが、しかもわれわれはこのうちにヘーゲルの論理学のもっとも根本的なものを見いだすことができる。」(1)と述べている。そして、そこに弁証法的な発展の論理があるとしながらもヘーゲル論理学の根本思想は、有・無・成とはまったく同じものではないとしている。「有・無・成は最初のカテゴリーであるが、それは最初のものとして特定の段階にあるカテゴリーであって、論理の全体をつらぬく根本思想ではない。」(2)このカテゴリーは、対立物の相互浸透の最初のもっとも抽象的な形態であって、そのうちに弁証法の対立物の規定を見出すことは出来るが、有・無・成が対立物

の相互浸透と全く同じものではない。「有・無・成の論理は、……まず、質の論理のもっとも抽象的な表現である。質の領域は多様と変転の世界である。成はその変転のもっとも抽象的な表現にすぎない。」(3)としている。この有論の最初の有・無・成という展開の仕方は、前後の相互関連からしても理解しにくい展開である。

そして、有(Sein)と無(Nichts)が、区別され得ないものであって有と無との区別について、区別があるはずだという区別にすぎないとしている。換言するならば、両者の区別は、即自的にすぎずまだ定立されていない区別なのである。松村一人氏は「そこには二つのものがあって、その各々は他方に見出されない一つの規定をもっている。ところが有は全く規定のないものにすぎず、そしてこの同じ無規定性がまた無でもある。したがって両者の区別は考えられただけのもの、全く抽象的な区別であり、それは同時になんらの区別でないものである。」(4) としている。すべての区別には、常に区別されたものを自己の下に包括する一つの共通のものがある。例えば二つの異なった類という場合には、類が両者に共通のものである。同じように、自然的な存在と精神的な存在があると言う場合には、存在が両者に共通のものである。これに反して有と無の場合には、これら二つの規定はいずれも同じような共通の基底を持たないのであるから、その区別には基底がなくそれらはなんら区別ではない。

このように有は、無規定性であって単純で直接的なものである。だからして有は、ただあるだけでそれ以上の規定を一切もたないものであり、つまり、純粋な無規定性であって空虚なものである。有のなかには、直観(Anschauung)や思考(Denken)されるべきものは何もないという意味で、空虚な直観そのものあるいは空虚な思考そのものだとしている。したがって、この無規定的で直接的な有は、実は無であって無以上のものではない。このような有は、有でありかつ無であるからして有ではないのである。このような論理の展開の仕方は、同語反復となり一見して形式論理学の矛盾律を犯しているように見える。しかしヘーゲルは、こうして有から無へと考察を通して有は無であると言い有は無と同一であり、無は有と同一だと主張している。このような有から無への移行と無から有への移行とは、統一として捉えるべきであってこの両者の統一が成(Werden)であるとしているのである。ヘーゲルは、有と無は同一であるという表現でもって実は有と無との統一としての成を明らかにしたいと考えたのである。その意味において彼は、この成は有と無と成果の真の表現であるといっている。そして、有と無が同一であるという時に実は、両者の統一としての成をすでに前提しているのである。

ヘーゲルは、ヘラクレイトス(古代ギリシャの哲学者)のいうところの「万物は流転する」という思想を念頭において流転しつつある万物は、有るものであると同時に元のままではない無になりつつあるとしたのである。つまり、有の要素と無の要素との統一された姿が万物の流転の姿なのである。無から有への移行は、発生(Entstehen)であり有から無への移行は消滅(Vergehen)であって、この発生と消滅という両側面の統一が流転なのである。われわれを取り巻く世界には、固定的で不変なものは存在しないし、万物は不断の変化と発展するものなのである。つまり万物は、存在すると同時にまた存在しないのであって、万物は流転しておりたえまなく変化し不断に生成と消滅の過程のうちにあるからである。ヘーゲルは、このような弁証法(Dialektisch)の端初の姿をまだ単純で抽象的であるけれども成というカテゴリーによって表現しようとしたのである。そしてヘーゲルは、この成を分析して有と無という概念を取り出して成が肯定面である有であり、否定面である無との統一であることを示したのである。

しかし彼は、成が有と無の統一であることを示すのに有は無規定であるから無と同じで有という概念(Begriff)が自己展開して成へと進んでゆくとしたのである。ヘーゲルは、このように有・無・成というもっとも単純なカテゴリーを弁証法的な変化の論理として捉えたのである。生成(Werdegang)とは、こうした視点からこの関係を捉えると発生と消滅という自己運動を通しての過渡的な過程の統一としての成果なのである。発生とは、無から有への自己運動であり反対に消滅とは有から無への自己運動である。そして生成とは、こうした発生と消滅との過程的な

統一のことを示した概念である。すべてのものを生成の見地において捉えるということは、弁証法的なものの捉え方を表したものである。したがって、そのような見地からは、すべてのものの自己運動を発生と消滅の過程のうちにあるものとして捉えることである。つまり、すべてのものは、発生と消滅との過渡的な状態におかれているものであり、その意味において有と無との過渡的な状態でないものはこの世に全く存在し得ないといえるだろう。

すでに述べたように、この発生と消滅そして生成という見地は、歴史的にはヘラクレイトスの「万物は流転する」という思想のうちに見ることができるだろう。この生成の見地こそが、ヘーゲル哲学の全体をつらぬき主体的で過渡的な方法となって表現されているのである。だからヘーゲルは、すべての事物に対してそれ自身の生成をそのもの自身に内在する固有な過程の産物として捉えている。したがって、すべてのものにおいて出来上がったものや完成したものは、与えられたものとして前提しなかったのである。つまり生成は、発生と消滅という過渡的な過程の成果として捉えるべきであって出発点として捉えるべきではないとしている。ではなぜヘーゲルは、成果である生成を具体的で真なるものをもって端初としないのか、それは真なるものを成果の形で見ようとするからである。過渡的な方法においては、真なるものは前提ではなくて結果でなくてはならないからである。つまり、自分自身の成果として生じたものだけが真なるものなのである。

ヘーゲルは、有が即時的で直接的なものである端初の概念であることについてこの内容が、如何に豊富なものであるにしても知識の中に最初に現れてくる規定としては単純なものであるとしている。そのことの意味は、直接的なものの中にまだ或るものから他のものへと前進を経た形態はないからである。ヘーゲルは、「思弁的方法の諸モメントはまず、有あるいは直接的なものである端初である。これは端初であるという単純な理由によって自立的である。しかし、思弁的理念から見れば、概念の絶対的否定性あるいは運動としての自己分割し、そして自己を自分自身の否定的なものとして定立するものは、思弁的理念の自己規定である。」(5)と述べている。したがって、端初そのものにとっては、抽象的な肯定と見える有はむしろ否定であり措定されたもので媒介されたものであり前提されたものである。しかし有は、概念の否定であって概念はその他者のうちにありながらもあくまで自己同一で自分自身を失わないものである。だから有は、まだ概念として定立されていない概念であって即自的な概念である。「だからこの有は、まだ規定されぬ、言い換えれば即自的あるいは直接的にのみ規定された概念として、普遍的なものである。」(6)としている。

さらにヘーゲルは「端初は直接的な存在という意味では、直観および知覚からとられ、有限な認識の分析的方法の端初であるが、普遍という意味では、綜合的方法の端初である。しかし論理的なものは、直接的に普遍であると同時に有であり、概念によって先行的に措定されたものであると同時に、直接的に有るものであるから、その端初は綜合的であると共に分析的な端初である。」(7)と述べている。そして、絶対的理念の運動の端初は、決して他から媒介されたものではあってはならないのであり、絶対理念自身によって措定(Setzen)された端初でなければならないとしたのである。むしろ、この運動の真の端初は、絶対理念自身でなければならない。この最後の絶対理念こそが、自分の前提(Voraussetzen)を措定するところの真の主体なのである。ヘーゲルは、学問の端初が何であるべきかの問題を『大論理学』の冒頭で提起し、学問的な端初を決める論理を展開している。ヘーゲルにおいて端初を決定する主体は、このように過程の最後のうちに横たわっているとされているのである。

一般的に学問の端初は、直接的なものであるのか媒介されたものであるかのそのどちらかでなければならないとされている。しかしヘーゲルは、次のように考えてこれに対置している。直接性と共に媒介を含まないものは、この世のどこにもあり得ないし、この両規定は不可分のものであるとしている。つまり、直接性と媒介とが固く結びついているということは、すべてのものに共通する普遍的な法則でなくてはならないものである。そして、直接的な存在が、そのものの媒介と結合されてもいるのである。直接性と媒介との統一ということの意味は、すべてのも

のを貫徹する法則であるとするならば学問の端初もやはり直接性と媒介との統一として把握されなくてはならないだろう。このように、学問の端初が直接的であるということは自明のことである。ヘーゲルの直接性(Unmittelbarkeit)ということの意味は、媒介されないである存在が始めのものとしてそれだけで端的にある存在で与えられた存在を表現するのであって、いわば端初という語の同義語とも見られる。つまり端初は、端初であるが故にその内容は直接的なものなのである。

こうしてヘーゲルは、有・無・成からなる不断の生成と消滅という原理を論理学の始めところで吟味して、成の根拠である有が単に成の一つのモメントに過ぎないことを明らかにしたのである。真なるものは、有ではなく成であり有から無へと変化し無から有への不断の生成と消滅の過程なのである。そして、成の根拠が、根拠づけられることによって論理の前進が、同時に後退でもあるという弁証法がここに展開されている。そしてヘーゲルは、まったく直観や表象との関係することなしに純粋な有という概念を引き出している。これは分析的な方法であるが、しかし、無の表象がなければ純粋な有の概念からはそれが内容のない無内容なものであり、始めに規定されたこと以上のものではない。また純粋な有は、無とはまったく等しいものだというこの分析は単なる同語反復に過ぎないものである。

直接的なものであるということは、即時的であるからしてすぐさま直接的な認識としての直観や表象を意味するわけではない。一般に抽象的な概念は、無媒介に与えられるならばそれは直接的なものであるということができるだろう。ここでの有ということは、そういう直観や表象からわれわれがその一側面を純粋に抽象して得られた概念であって、そこから規定されたそれ以上のものを引き出すわけにはいかないのである。ここで有が直接的だとするのは、それが始めてであるから他のものによって媒介されたものではなく、そこに直接このように与えられたものだという意味だけのことである。このようにヘーゲルは、与えられた概念の内容だけにとどまってしかもそれから規定された新しい内容を引き出すことで、有・無という純粋な概念を綜合したより豊富な概念に達するとしたのである。しかし、絶対的方法によっては、有というまったく単純な概念から何ら世界の直観や表象なしに論理学のすべての概念を内的必然的に導き出すとしているが、それが不可能なことであることは明らかである。

有から無への移行は、ただあるだけとする即時的な有から有と無との対自的な区別として、対立へと進む絶対的な方法の一つの過程である。次にこの対自的な有と無からは、それらを自分のモメントとして含む成への移行は区別と対立から統一へと進む絶対的方法の次の過程なのである。ヘーゲルによれば、最初の有が純粋な無規定の即時的な有であり、次の有と無が規定された対自的な段階のものであって、最後の成が即時かつ対自的で絶対者を表現している。そして、次の対自的なものは、世界の有限的な事物を表現しており概念はその即時の状態の否定の否定を通じて、より具体的なより高次の形態で最初の自分に復帰するということになる。

(2)

先にも見たように、学問の端初は、直接的なものであるか、あるいは媒介(Vermitteln)されたものであるのか、そのどちらかでなければならないだろう。ヘーゲルは、直接性(Unmittelbarkeit)と媒介の関係について次のように叙述している。「端初として捉えることのできる二面は、媒介されたものとして結果であるか、直接的なものとして本来の端初であるのかのいずれかである------即ち天上であれ、自然の中であれ、精神の中であれ、あるいは他の如何なるところであれ、この直接性とともに媒介を含まないようなものは何一つとして存在しないということ、したがってこの二つの規定は不可分のもので、両者の対立はくだらないものだ」(8) としている。しかし学問としては、この点での説明することが求められる。論理学の各命題の中には、この直接性と媒介との二規定が両者の対立と真理とについての説明が含まれている。だからこの対立は、知識と認識の関係からして直接的な知識や媒介的な知識のより具体的な形態を持つものである。そして、認識一般の本性が、論理学の中で考察されるとまた一層具体的な形式の中にある認識が探求されるのである。

このような学問の端初についての両規定は、直接

性と媒介との関係を端的に表現するならば自らが互いに結びついているということである。さらにヘーゲルによれば、学問の端初を捉えるに「知識の直接性はその媒介を排除しないばかりか、直接知は媒介知の所産であり結果であるという風に、両者は結合されているのである。直接的な存在がその媒介と結合されているということも同様にすぐわかることである。」(9)そして、直接性と媒介の例は、われわれ人間を取り巻く衣・食・住という生活過程においても見られることであるとしている。「種子や両親は、生み出される子供、等々に対しては直接的な、端初的な存在である。しかし種子や両親は現存するものとしては直接的にあるが、同時にそれらもまた生み出されたものである。そして子供、等々は、その存在が媒介されたものではあるが、それらはあるのであるから、直接的なものである。」(10)と端初の直接性について述べている。

このようにヘーゲルのいう直接性は、媒介されていないでただ有るという存在で始めのものとして、それだけで端的にただ有るという存在そのものである。そして、ただ有るという与えられた存在を、表現するものであって端初(Anfang)の同義語と見られるものである。しかし、直接性と媒介との統一ということが、すべてのものに通じる普遍的な法則であるとするならば、学問の端初もやはり直接性と媒介との統一として把握されなければならないだろう。ヘーゲルは「端初は端初なるが故に、その内容は直接的なものなのである。」(11)として端初が直接的であるということを示している。しかし問題なのは、同時にヘーゲルが端初を媒介されたものと規定していることである。ヘーゲルの端初論は、始めからこうした混乱と矛盾を含んでいるのである。なぜならば、もし端初が媒介されたものであるならば、その媒介したものこそが真の端初であるべきだからである。このような端初は、一般に何によって媒介されるのかを吟味しなくてはならないだろう。

例えば、ヘーゲルが言うところの「私がベルリンにいるということ、すなわち私の直接的な現存は、ここへ旅行してきたこと、等々よって媒介されているのである。」(12)と述べている。このような内実は、これは先行する事柄に対しその過程による媒介であって、それは自分とは異なった他者による媒介の形式であるから端初自身に内在する媒介ではなく外的媒介とみなされるものである。こうした外的媒介は、常にその先行者に依存しそれを前提することによってのみ存立するのであって、何ら自立性を持つものではない。ヘーゲルは、こうした外的な媒介によるものを真の媒介とは考えていない。むしろ真の媒介とは、内的で自から存立可能なものであって、自立性のある内的媒介でなければならないとしている。つまり、ヘーゲルのいうところの真の媒介とは、端初自身の内部には存立してない外的なものによっての媒介ではなくて、自分自身のうちで自己を完結するものでなければならない。

したがって、端初を媒介するものが自己の外にあるのではなくして、自分自身の内部にあるような自己媒介のことなのである。先にも見たように、ここで問題となるのは、端初が直接的であるということであり、ただヘーゲルが端初を同時に媒介されたものと規定している点にある。なぜならば、もし端初が媒介されたものであるならば、その媒介したものこそが真の端初であるべきだからである。したがって、真なる媒介の本質は、外的なものではなく内的媒介のことでなければならないだろう。つまり、ヘーゲルによれば、真の媒介とは外的なものとの媒介ではなくて自分自身の内で自己を完結するものと規定することである。だがしかし、ヘーゲルがこうした内的媒介を真の媒介と見なしたことは、彼が過渡的な立場を真なるものとする見方と関係している。というのもヘーゲルが真の媒介と考えているものは、実際には過渡的な媒介以外の何ものでもないからである。そこでヘーゲルは、端初自身の内部にある内的媒介者をいわゆる端初(Anfangen)から区別して根拠(Grund)と呼んでいる。この根拠と端初との関係をヘーゲルは、次のように述べている。

「媒介性が端初・最後のものが根拠・前進とは根拠の面・前進とは根拠への、根源的なものと真なるものへの復帰であって、端初となるものはこの根拠に依存するのであり、また事実、端初はこの根拠によって産み出されるものだということが肝心の点であることは、われわれの認めざるを得ないところである。」(13)としている。だから「この意味で意識は、

その端初である直接性から始めて、その道を進みながら、そのもっとも内面的な真理としての絶対知につれもどされる。だからまた、この最後のもの根拠こそ最初に直接的なものとして現れるところの、その最初のものの生まれる胎盤なのである。」(14) と述べている。つまり、端初(Anfangs)の真の内面的な媒介者である根拠(Grund)とは、端初の先行段階に存在するものではなく、反対に端初自身の認識過程の最後の段階に存在するものである。許萬元氏は「この最後のものである根拠こそ、体系全体の真の原理であり、端初を産出し、かつ運動せしめる主体なのである。」(15)と述べている。

とすると学問の端初となるべきものは、われわれによって勝手に措定(Setzen)されるべきものではなくて、むしろ反対に対象みずからによって端初として産出されたものでなければならないだろう。学問において端初が決定されそれが必然性において展開されるためには、必ず最後のものが把握されていてそれが根拠として前提されなければならないことを意味している。このような学問的思考は、現実の発展の結果を持って始めるところの追思考を根拠とするものである。追思考(Nachdenken)とは、結果から反省するという思考方法のことであり、一般に学問的な認識には追思考が用いられていることは周知のことである。このように対象は、自らが自分の端初を自分自身で作り出したときにのみ始めて自立的な体系として存立し得るのである。「したがって、端初から根拠へ進む認識の運動は、存在的には、産出された直接的なものからそれを産出する主体へ向かっての存在体系内部での自己運動である。」(16)換言するならば、端初から根拠への認識の運動は、与えられた現象からその本質へ向かっての進化の運動であるにすぎないのである。

だから端初の直接性というのは、媒介されていないでただ有るという存在で始めのものとしてそれだけで端的に有るという存在そのものなのである。とはいえ端初とは、ただ根拠(Grund)によって措定されたものだということだけでは充分に納得させることはできないだろう。むしろ端初は、根拠によって措定されたものとして同時にその根拠の存立の前提なのである。一般的に端初とは、対象自身の認識過程においてその本質をなすものによって措定された最も直接的な前提なのである。これがヘーゲルの認識過程における端初決定の論理の要点である。自分の作り出したものを前提とすることは、実は自分自身を前提することに他ならないのである。こうして彼は、その論理学の端初を存在としながらも最後のものである理念によって、措定されたものであることを強調したのである。だから許萬元氏は、こう述べているのである。「理念の進展のうちで、端初が即自的にもっていた規定、すなわち、端初は措定され媒介されたものであって、存在的で直接的なものではないことが明らかになる。」(17)

つまり、直接性と媒介とが結合しているということは、すべての場面において共通の普遍的な法則でなければならない。直接性と媒介との統一ということがあるのであれば、学問の端初もやはり直接性と媒介との統一として把握されなければならないことになる。学問の端初が直接的であるという点についてヘーゲルは、直接性というのは媒介されないで有るという存在であり、始めのものとしてそれだけで端的に有るという存在を示すもので端初は端初であるが故に、その内容は直接的なものなのであるとしている。先にも指摘したように問題は、ヘーゲルが端初を同時に媒介されたものと規定されたものとしていることである。なぜならば、もし端初が媒介されたものならば、その始めの媒介をしたものこそ真の端初であるべきでものである。ヘーゲルは「それ故に、学にとって根本的なことは、単に直接的なものが端初であるということではなくて、むしろ学の全体がそれ自身の中で円環運動をなしており、そこでは最初のものが最後のものであると共に、最後のものがまた最初のものであることになっているということである。」(18)と述べている。

だからまた、他面においては、学問の認識過程の全体が円環運動をなしており運動の根拠として運動の復帰点であるものが結果と見られざるを得ないのである。このような観点から捉えて見ると根拠こそが結果であることをヘーゲルは指摘している。「最初のものがまた根拠であって、最後のものは却って導き出されたものである。すなわち最初のものから出発して、正しい推論によって根拠としての最後のも

のにいたるのであるから、この根拠こそ結果である。」(19)と述べている。さらに端初からの進展は、ただこの端初の規定の進行と見られるから、従って端初をなすものは後続の全過程の根底に存在しそれから消え去ることはない。だから進展は、単に他のものが導き出されるということにあるのではなく、また全くの他者に推移するということでもない。

このような推移が起こる場合には、その進展はまた再び止揚(Aufheben)されてしまうのである。最初のものから、すなわち、端初をなすものからの進展は、結果としての根拠へいたることになる。それ故に学問の端初は、あらゆる後続の展開の中に現実に存在し自分を維持しているところの基礎であり、後続の各々の規定の中に何時も必ず内在しているのである。ヘーゲルは「それで端初はまたこの進展を経ることによって、それが端初としてもっていた一面性、即ち一般に直接的なものであり、抽象的なものであるという規定を失う。端初は媒介されたものとなり、従って学の進展の線は円となる。------同時にまた端初をなすものはその出発点においてはまだ未発展のものであり、無内容のものであるから、それはまだ端初の中では本当に認識(Erkennen)されないものであり、学がはじめて、しかもその学の全展開によってはじめて、端初の完全な、内容に充ちた、またはじめて本当に基礎付けられた認識となるということが云えるのである。」(20)と述べている。

端初が思惟の端初だという意味では、端初はまったく抽象的で一般的なものであり、内容をまったくもたない形式であるはずだからである。したがって、われわれの認識は、単なる端初そのものという観念以外の何ものをも持たないのである。この観念の中には、どういうものがあるかを吟味して見ると、まだ何もないが何かが生ずべきものであるというにすぎないものである。ヘーゲルは「端初は純粋な無ではなくて、何かがそこから発生するはずの無である。それ故に有もすでに端初の中に含まれている。それ故に端初は有と無との両者を含んでおり、有と無との統一である。」(21)としている。換言すると端初は、同時に有であるところの非有であり、また同時に非有であるところの有である。有と無とは、端初においては区別されたものとして存在するのである。という端初は、何か他のものを暗示しているものだからである。そして端初は、或る他のものである有に関係しているところの非有である。始まりつつあるものはまだない。それはまず有をめがけて進むものであってそれ故に端初は、非有を止揚するものであるような有を非有に対立するものとしての有を含んでいる。「しかし更にまた、始まるところのものはすでに存在するとともに、それはまたまだ存在しない。それ故に有と非有という対立するものは、この始まりの中でそのまま合一している。言いかえると、端初は両者の区別のない統一である。」(22)とヘーゲルは述べている。

（3）

ヘーゲルは、直接性(Unmittelbarkeit)が端初であり、そして、最初のものが根拠であるということを次のように述べている。「だから他面ではまた、運動の根拠として運動の復帰点であるものが結果と見られざるを得ないものであることがわかる。この点から見ると、最初のものがまた根拠であって、最後のものは却って導き出されたものである。すなわち最初のものから出発して、正しい推論によって根拠としての最後のものに至るのであるから、この根拠こそ結果である。」(23) としている。端初をなすものからの進展は、ただこの端初の規定の進行と見られるからして、端初をなすものは後続の全過程の根底に存在しそれから消え去ることはない。だから、ヘーゲルはこう述べている。学問の端初は「そんな推移が起こる場合には、その推移はまた再び止揚されてしまうのである。それ故に哲学の端初は、あらゆる後続の展開の中に現在し、自分を維持しているところの基礎であり、後のそれぞれの規定の中にいつも必ず内在しているものである。」(24)このように、学問において最初のものは、過程的にも結果である根拠として現れざるを得なかったのである。

だから端初は、この進展の過程を経ることによってそれが端初としてもっていた側面が直接的なものであり、抽象的なものであるという規定性を失うことになるのである。さらにヘーゲルは「しかし、結果が始めて絶対的根拠として出てくるからといって、この認識の進展は暫定的なものというようなものでもなければ、また蓋然的なもの、仮説的なものでも

ないその進展は事柄と内容そのものとの本性によって規定されるものでなければならない。」(25) と述べている。学的な端初としては、学が始めてであってしかもその学の全展開によって始めて端初の完全な内容に充ちた、また始めて本当に基礎付けられた認識となるということである。さらに純粋有は、端初としてあるとするが故にそれはまた本質的にただ純粋で、直接的なものであるという一面性を帯びざるを得ないのである。そして、ヘーゲルは「純粋有がこういう純粋な無規定性でなく、規定されたものであるというなら、それは媒介されたものとなっているのであって、そこではすでに一歩進んだものがとられていることになる。規定されたものとは最初のものに何か他のものの加わったものを意味するからである。」(26)と述べている。

そして、端初が有であるのは、有以外の何ものでもないということで端初そのものの本性の中に含まれていることである。だから端初は、学の端初であるというところからこの端初に対して立ち入った規定とか、積極的な内容を入れることも本来的には許されないのである。ということの意味は、まだ事柄そのものが存在しないこの端初において学は空虚な言葉であり、仮定的に立てられ証明することのできない観念にすぎないからである。ヘーゲルは、端初が学の端初であるという意味からしてこの端初に対して規定とか積極的な内容を示さないのである。ヘーゲルは「純粋知識は、ただ端初が抽象的な端初であるべきだと、いうこのような消極的規定を与えるにとどまる。だから、純粋有が純粋知識の内容と考えられるかぎり、純粋知識はその内容から手を引き、内容をそのままに放置しておいて、それに何らそれ以上進んだ規定を与えないようにしなければならない。」(27)としたのである。

こうした端初は、純粋な無ではなくてまだ何もないが何かが生ずべきものであり、何かがそこから発生するはずの無である。それ故に有は、すでに端初の中に含まれている。だからヘーゲルは「それ故に端初は有と無との両者を含んでおり、有と無との統一である。言い換えると、端初は同時に有であるところの非有であり、また同時に非有であるところの有である。」(28)としている。また有と無とは、端初において区別されたものとして存在する。だから端初は、何か他のものを暗示しているものだからなのである。ヘーゲルは「端初はある他のものである有に関係しているところの非有である。始まりつつあるものは、まだない。それはまず有をめがけて進む。それ故に端初は非有に別れを告げ、非有を止揚するものであるような有を、非有に対立するものとしての有を含んでいる。」(29) と述べている。しかし、始まるところのものは、すでに存在すると共にそれはまだ存在しないのである。それ故に有と非有という対立するものは、この始まりの中でそのまま合致している。換言するならば、端初は、有と非有との両者の区別のない統一なのである。

だからヘーゲルは、有と無の同一を示唆して純粋有と純粋無は同じだとしている。それ故に、純粋有と純粋無とは同一であるから真理であるところのものは、有でもなければまた無でもなく有が無に、また無が有に推移することではなくてむしろ両者が同一のものでないということである。有と無の両者は、絶対に区別されるがしかしまた分離し得ないものであり、不可分のものであって各々はそのままその反対の中に消滅するのである。それ故に、両者の真理は、こういう一方が他方の中でそのまま消滅するという運動すなわち成である。換言するならば、この運動は、そこでは両者が区別されているが、しかしまた、そのまま解消されてしまっているというような区別を通して行われるところの運動なのである。このようにヘーゲルは、成こそが最も普遍的な弁証法の概念であるということを指し示しているのである。そして有と無は、それぞれ個別の概念ではなく成という運動を表現する次の概念において吟味されることで、結果に対する反省的思考であるとする追思考が求められるのである。

許萬言氏は、学問的思考の本質である反省的思考といわれる追思考(Nachdenken)について叙述している。「一般に、思考は存在と同一な思考でなければならず、したがって、存在が体系的となった場合にのみ、思考もまた体系的＝学問的な思考となる必然性をもつ、といえるのである。だが、存在において体系が成立するのは、存在の全運動の結果においてだけである。とすれば、当然学問的認識の固有の成立

地盤は、まさに歴史の終局段階だけである、といわなければならないであろう。」(30)としている。つまり「ヘーゲルにしたがえば、現実に対する学問的認識としての哲学が成立するのは、まさに現実がその形成過程を完成し自己をできあがったものとなした時期においてでなければならないのである。」(31)とするわけである。「したがって、一般に、現実に対する学問的認識というものはつねにあとから成立するところの、いわば結果論的認識であって、現実の歴史的発展とは逆の道を進むものである。言い換えれば、学問的思考の本質は常に結果論的思考であり、その意味で追思考と呼ばれるものでなければならない。」(32)としているのである。

有についてもう少し詳しく言えば、単純な内容のない直接性であってその対立は純粋無であり、両者の統一は成である。無から有への移行は、生起でありその逆は消滅である。このように論理学の始まりは、有という直接的で無規定的で即時的な概念なのである。これらのことは、内容をもたず空虚であることからして純粋な否定である無に等しい。したがって、この二つの概念は、対立していると同じく絶対的に同一であり、各々は直接にその反対物への消滅である。ヘーゲルは、有と無の両者のこのような統一的な移行を純粋な成であるとしている。無から有への移行は、発生でありその逆である有から無への移行は消滅であって、この発生と消滅の過程が沈殿して静止した状態となり、単純なものとなったものが定有である。この定有とは、規定性を持った有であるからして質であり、対自的な実在性を保持し規定された限界を持った定有である。規定され限界を持った定有は、自分から他のものを排除するものであり、そしてそれは他のものに対する否定的な態度によって媒介されているのである。

見田石介氏は、ヘーゲルの有・無・成の仕方について「世界の真相は、有でもなく、成すなわち有から無へ、無から有への不断の生成消滅の過程であるということである。」(33)と述べている。そして「成の根拠がある有がたんに成の一つのモメントにすぎないことが明らかにされて、根拠が根拠づけられるものによって逆に根拠づけられる。」(34)としている。だから「ヘーゲルは、すこしも表象の助けなしに、純粋な有という概念そのものを分析して、そこから新しい無の概念を引きだしている。------しかしわれわれにすでに無の表象があるのでなければ、純粋の有の概念からは、それがまったく無内容なものだとはじめに規定されたこと以上のものは、何も出てこないだろう。」(35)と述べている。さらに見田石介氏は「しかしここで有が直接的だというのは、それが始めであるから、他のものによって、媒介されたものではなく、そこに直接に与えられたものだというだけのことで、------ヘーゲルがいたるところでそれを混同しているが、直接的であるということが、すぐさま直接的認識としての直観や表象を意味するわけではない、抽象的な概念でも無媒介に与えられれば直接的である。」(36)と詳述している。

だからヘーゲルは、有・無・成の変化の過程を種々なやり方で試みた後に最後になって成の表象を持ち出してきて成の表象は誰でも持っているはずであるとしたにすぎない。それを分析してみれば、そこに有と無との各々の要素が出てきて成がこの二つの要素の統一であることも容易に理解できる。有から無へ有と無から成へという過程は、ヘーゲルの種々な場面において見られる分析的な方法と綜合的な方法の論述の仕方である。実はこの内容も、われわれが与えられた成の表象を分析し、そこに有および無という二つの構成要素を見いだした後でそれらを再び綜合して成を理解する過程なのである。見田石介氏は、「有から無へ、有と無から成へ、という過程は、じつは、われわれが与えられた成の表象を分析しそこに有および無という二つの構成要素を見出したあとで、それらをふたたび綜合して、成を理解する過程、すなわち成の表象を成の概念に変えるまったく合理的な分析的方法の認識過程にほかならないのである。」(37)と述べている。

このことの意味は、成すなわち不断に発生と消滅する現実の世界の表象を分析してそこに有および無という二つの構成要素を見出して、そのうちの無の方を捨象して先に有の方を取り上げてこれを考察し、次に始めに捨象しておいた無を取り上げてこれを考察し吟味するのである。そして、最後にこれら有と無を綜合して成に到るとするのである。こうした分析と綜合を通じて始めの成の表象を、成の概念とし

て捉える思考の過程を示したものにすぎない。すなわち、成の表象を、成の概念に変える認識過程なのである。だがしかし、結局のところヘーゲルは、直接性と媒介性について種々なことを言っているのであるがその立場は不明確である。われわれ人間の認識は、端初的には学問においても概念的に把握し、それからさらなる認識を深めるという仕方で反省的思考、すなわち、追思考をするのである。だから、われわれの学的認識は、直接性か媒介性かということではなく、直接性と媒介性を統一した仕方でもって行われるものと捉えるべきであろう。このようなことからしてヘーゲルの端初論は、有・無・成の弁証法を展開しているのであるが、その過程には当初から成なるものを前提(Voraussetzen)した理解しにくい発展の論理なのである。

注

(1) 松村一人著、『ヘーゲルの論理学』 勁草書房、1965 年 p. 72
(2) 同上書、p. 72
(3) 同上書、p. 73
(4) 同上書、p. 77
(5) G.W.F.Hegel Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften I Suhrkamp taschenbuch Wissenschaft §.238. 邦訳、ヘーゲル著、松村 一人訳『小論理学』下巻、岩波文庫、岩波書店、昭和 39 年 p. 240
(6) G.W.F.Hegel Enzyklopädie I ibid. §.238. 邦訳、同上書、下巻 p. 240
(7) ibid. §.238.邦訳、同上書、下巻 p. 240
(8) G.W.F.Hegel Wissenschaft der Logik 1 Suhrkamp taschenbuch Wissenschaft S.65. 邦訳、ヘーゲル著、武市健人訳、『大論理学』上巻の 1、岩波書店、昭和 39 年 p. 58
(9) G.W.F.Hegel Enzyklopädie I ibid. §.66. 邦訳、同上書、上巻 p. 222
(10) ibid. §.66. 邦訳、同上書、上巻 p. 223
(11) G.W.F.Hegel Wissenschaft der Logik II ibid. S.55. 邦訳、同上書、下巻 p. 361
(12) G.W.F.Hegel Enzyklopädie I ibid. §.66. 邦訳、同上書、上巻 p. 223
(13) G.W.F.Hegel Wissenschaft der Logik I ibid. S.68. 邦訳、同上書、上巻の 1 p. 62
(14) ibid. §.68.邦訳、同上書、上巻の 1 p. 62
(15) 許萬元著、『ヘーゲル弁証法の本質』、青木書店、1972 年 p. 136
(16) 同上書、p. 136
(17) G.W.F.Hegel Enzyklopädie I ibid. §.239. 邦訳、同上書、下巻 p. 242
(18) G.W.F.Hegel Wissenschaft der Logik I ibid. S.68. 邦訳、同上書、上巻の 1 p. 63
(19) ibid. S.68.邦訳、同上書、上巻の 1 p. 63
(20) ibid. S.69.邦訳、同上書、上巻の 1 p. 64
(21) ibid. S.70.邦訳、同上書、上巻の 1 p. 66
(22) ibid. S.70.邦訳、同上書、上巻の 1 p. 67
(23) ibid. S.68.邦訳、同上書、上巻の 1 p. 63
(24) ibid. S.69.邦訳、同上書、上巻の 1 p. 64
(25) ibid. S.69.邦訳、同上書、上巻の 1 p. 64
(26) ibid. S.69.邦訳、同上書、上巻の 1 p. 65
(27) ibid. S.69.邦訳、同上書、上巻の 1 p. 65
(28) ibid. S.70.邦訳、同上書、上巻の 1 p. 66
(29) ibid. S.70.邦訳、同上書、上巻の 1 p. 67
(30) 許萬元著、『ヘーゲル弁証法の本質』青木書店、1972 年 p. 129
(31) 同上書、p. 129
(32) 同上書、p. 129
(33) 見田石介著、『見田石介著作集』第一巻、大月書店、1976 年 p. 204
(34) 同上書、p. 204
(35) 同上書、p. 204
(36) 同上書、p. 205
(37) 同上書、p. 207

(Received:December 31,2009)
(Issued in internet Edition:February 8,2010)